

『希望の酒』

山本

あらすじ

望実の実家は地方の小さな酒蔵だ。父の希一は蔵を継続させるため、毎年鑑評会で金賞を狙うが結果を出せずにいる。跡を継ぐつもりのない望実には都会のデザイン会社で働いている。ある年の冬、地震が望実の地元を襲う。お酒は無事だったが、瓶に貼るラベルがない。そこで望実には新しいラベルを提案する。

4919字

目が覚めた。セミの声が次第に大きく響いてくる。開け放った窓を風が吹き抜ける。潮の香りがする。

タオルケットを蹴飛ばし、望実は「ああ」と伸びをした。

遅い朝ご飯を食べた。隣で結子が数独をやっている。老眼鏡には慣れないらしい。時々外しては、まぶたをマッサージしている。

トラックが停まる音がした。それからP箱の中で空瓶が揺れる音。しばらくすると希一が顔を覗かせた。首に巻いたタオルで汗を拭いている。

「やっと起きたのか。会社員は気楽でいいな」

「普段は早く起きてます。満員電車は地獄なんだから」

「そうか。じゃあ、こっちに戻ってくるか？」

希一は麦茶を飲み干し、もう一杯グラスに注いだ。

「酒造りは知識より経験だ。今から五感を鍛えれば、跡を継ぐ頃にはいい酒、造れるようになるぞ」

誰が継ぐって言ったのよ。

ご飯で口をもぐもぐさせながら、望実は呟いた。

「手、合わせとけよ」

希一が仏壇と、その隣の額縁に視線を流す。それから、靴下を脱ぎながらドタドタと出ていった。

額縁には望実の曾祖父が書いた「初風」の文字が飾られている。この酒蔵が代々醸す銘柄がそれだ。ラベルにもその額縁の文字が印刷されている。地酒と言えは聞こえは良いが、「知る人ぞ」すら知らない銘柄。温泉街というのが幸いし、周りの旅館や飲食店への納品でどうにか続けられてきた。

ずらした眼鏡から、結子が上目遣いに望実を見る。

「夕飯、アジフライの予定だけど」

ニヤッと望実は笑顔を返した。

衣がサクッと鳴る。真っ白な鯔の身が湯気を放つ。切子のお猪口に注いだ冷たい純米酒をキュッと口に注ぐ。

その様子を見届け、希一は「だろ」と笑った。それから自分もグイッと飲む。

「で？ どうだったの？」

途端に希一が沈黙する。

三人の動かす箸と咀嚼音だけがBGMのように続いている。

「別にいいじゃない」

結子が笑った。結子はめっぼうお酒に強い。

「賞を取れば『いいお酒』ってわけじゃないんだから。『うちにはうちの造りがある』って、お爺ちゃんもよく言ってたでしょ」

「俺だってそう思ってるよ」

賞というのは全国新酒鑑評会のことだ。希一は自分が杜氏になってから毎年、これで金賞を狙っている。しかし実際にはまだ入賞酒にも選ばれたことはない。

「一回でいいんだ。一回」

希一がお猪口の酒を見つめる。

「金賞を取れば評価が変わる。人の見る目が変わる。売上だって全然変わってくる」

飲み干し、かあっと唸った。

「高縄酒造の社長なんか、今じゃ外車乗ってんだぞ。茂さんにだって、ポルシェの軽トラで配達させてやりたいじゃないか」

茂さんは先代の時からずっと、この蔵の営業や配達をやっている唯一の社員だ。今年で齢七十近くになる。望実が高校生の頃、バスに遅れるとよく茂さんのトラックで市内にある学校まで送ってもらった。

「茂さんにポルシェって」

結子がふふふと笑い出す。

「そうだよ。だいたいポルシェに軽トラなんてあんの？」

「例えばの話だろ」

「なんで茂さんがサングラスかけてポルシェの軽トラ走らせなきゃなんないのよ」

「そんなことまで言っていないだろ」

「茂さんが英語話し始めちゃったらどうすんのよ」

「それはそれでいいじゃないか」

「やめてちょうだい」

堪えられなくなった結子がはははと声を上げ始める。

「いいか？ 今年こそは金賞だ」

希一が宣言した。目の周りはしっかり赤い。

「この蔵を守る。それがお義父さんとの約束だ」

「頑固なところは似てんのよ。遺伝でもないのに」

アジフライを頬張り、望実は酒を煽った。希一が造るお酒は食事に寄り添う美味しいお酒だと思う。でも今の流行じゃない。だとしても、お酒を飲む人は減っている。蔵の数も年々少なくなっている。

「もう一本、開けるか？」

少し迷ってから望実は「うん」と返した。

「だろ」

真っ赤な顔に白い歯を覗かせ、希一が跳ねるように席を立つ。

洗ったばかりの包丁を持ち、結子が糠漬けを切り始める。網戸を抜け、海からの風が注ぎ込む。蚊取り線香の煙が揺れている。

帰りの新幹線で、望実が希一がお土産に持たせた自分の蔵の酒を眺めていた。

希一は望実が農大に行くことを願っていた。知ってはいた。でも望実が美術系の大学に進学した。伝統の大切さは分かる。ただそれが負担になるなら、誰かが止める決断をしなければいけない。

そのことで、二人が話し合ったことはなかった。

酒造りは冬に行われる。造りが始まると、希一は無口になった。発酵の状況に合わせて生活を送る。造りの時期には茂さんの他に三人雇ったが、食事や睡眠も決まった時間には取れなかった。毎年冬の間、希一と落ち着いて会話をすることはなかった。

地元を離れる日、茂さんが駅まで送ると言った。雪が舞っていた。

「もっと大変なところで生きていくんだ。一人で行けるだろ」

希一が口を挟む。

結子が望実のカバンに、近所の神社のお守りを結びつける。

「早く婿養子、見つけてこい」

希一が蔵へ向かって歩いていく。

「バカじゃないの」

望実はその背中に投げつけた。

大学を卒業し、デザイン会社に就職した。それから五年。祖母のお葬式に戻ってくるまで、望実が一度も帰らなかった。

スーパーで買い物しながら、時々日本酒を手にとってみる。

安いよな、といつも思った。

精米して、浸水して、寒い中、手を真っ赤にして、蒸して、発酵させて、重い米を担いで、何往復もして、搾って、瓶詰めして。

720ミリの液体に、その全てが注がれている。

「報われないよな」

瓶を棚に戻し、レジへ急ぐのが常だった。

結子から新酒の写真が届いた。その三日後のことだった。地震のニュースが朝からテレビを騒がせていた。

メールを送ってみたが既読はつかなかった。

電話が鳴ったのは望実がランチの列に並んでいたときだった。

「びっくりしたわよ〜」

慌てて列を抜ける望実の耳に、結子の笑い声が響いた。

「大丈夫なの？ みんな？ 蔵も？」

家には大正時代に建てられた蔵が三つ残っている。一つはお酒の造りに、一つはお酒の保管に、もう一つは他より小さく、倉庫として使っていた。

「大変は大変だけど、みんな無事よ。蔵も亀裂は入ってるけど、とりあえず補強すれば、今造ってる分くらいは瓶詰めできるんじゃないかって」

戻ってくる必要はないと結子は言った。それでも望実はお酒の運行状況を確認、メッセージを送った。ローカル電車は本数が減っている。新幹線の駅まで、茂さんに迎えを頼んでほしい。到着の時間を送ると、了解のスタンプが返ってきた。

いつもなら電車の車窓に広がる湾だ。それを茂さんのトラックから眺めていた。防砂林の松が灰色の雲の下に並んでいる。傾いている家屋がある。道路の端が窪んでいる交差点がある。

湾の反対側はもっと被害が大きかったのだと、茂さんが視線をやりながら説明した。

「希一さんもさすがに塞ぎ込んでてね。あんまりキツイ口調はやめてあげてな」

「まるでわたしがいつも怒ってるみたいじゃない」

望実が笑った。

『俺が迎えに行く』って言っただけだよね。まだ割れた瓶の片づけも残ってっ
ね」

茂さんによると、積んであったケースが倒れ、瓶が何本か割れたらしい。タンクも少し傾いた。でも仕込みは最後、留を終えた後だったので大丈夫だったようだ。

「一番小さな蔵だけは持ち堪えんでね」

茂さんがため息をつく。倉庫にはかつて仕込みで使っていた道具も保管されていた。茂さんの思い出の道具だ。

「いったん全部崩さんといけんみたいだわ」

黄色の点滅信号を曲がっていく。いつもの裏道は進まない。幅の広い一車線を対向車とゆっくりすれ違いながら、トラックは蔵へ向かっていった。

トラックを降りる。閉めるドアの音が響く。結子がタオルで手を拭きながらやってきた。ぱっと見は夏に帰省したときと変わらない。ただ、妙な静けさが湿った潮の香りと共に広がっていた。

「ちょうどさっき、掃除が終わってね。みんなでお昼にしてたところ」

「蔵、見てきていい？」

「危ないわよ」

「中には入らないから」

そう言って、望実が結子にバッグを渡したときだった。

「ダメだ」

希一の声が響いた。

「まったく見通しが立たないんだそうだ。やっと電話は繋がったけどな。向こうは被害が酷いらしい」

携帯を握った手を、希一が「よお」と挙げる。

「元気じゃない」

望実が茂さんを睨む。茂さんは「おかしいな」と頭を触った。

ダメなのはラベルのことだった。

少量生産のこの蔵では、毎年瓶詰めする本数が決まった時点で、それより少し多い枚数を発注していた。印刷をお願いしていたのは湾の反対側の小さな会社だ。向こうではまだ電気や水道の復旧も目途がたたず、避難所生活を送っているという。

昨年作ったラベルの残りは一番小さな蔵に保管してあった。希一が懐中電灯を照らし、半壊の真っ暗な蔵に意を決して入った。見つかったのは汚れたり破れたりしたラベルだけだったらしい。

「瓶詰めできても、蔵に眠ったままになっちゃう」

昼ご飯を終え、お茶を飲むみんなを前に希一が「すまん」と頭を下げた。

「何も貼らないわけにはいかんしなあ」

「売らなきゃ次の造りもできん。みんなの給料も払えなくなる」

「せめて春までにできれば、ね」

「建物が崩れてしまったらしい。道路も亀裂が酷いみたいでな。自分たちの生活がいつ日常に戻るかも分からんということだ」

「むしろ何か必要なもの、届けたほうがいいんじゃない？」

結子が心配する。「そうだな」と希一も頷く。

「印刷所ならわたしが手配するよ」

望実はやった。

「勤め先の知り合いに頼んでみる」

「ただ、原版があのお会社にしかなくてね」

茂さんが説明する。

「それがないと、印刷しようにもできないんだわ」

「わたしが新しくデザインするよ」

望実はやった。

「それなら何とかなるんじゃない？」

「ダメだ」

もう一度、希一の声が響いた。

「どんなデザインだっていってわけじゃないんだ。ずっと同じラベルを使ってきた。それでみんなに認知してもらっている。この蔵の酒には『これ』というものがある」

希一が立ち上がる。それから例の額縁を持ってきた。

「何より、これだ。この文字が入らんと、うちの酒にならん！」

希一が額縁を望実に渡す。望実はその少し色褪せた半紙に写る二文字を見つめた。

沈黙が部屋を満たす。

「変えればいいんじゃないか？」

破ったのは茂さんだった。

「慣れ親しんできたラベルだよ。変わるの辛い。でも、ラベルが変わったって、希一さんの造りが変わるわけじゃないんだろ？」

「そりゃ、もちろん」

「お酒は名前やラベルじゃねえ。味なんだから」

カシャッという音が鳴る。それからもう一度。望実はスマホでその文字を撮った。

「この文字は入れる」

座り直し、真っ直ぐ希一を見た。

「だからお願い、デザインは任せて。今月中には仕上げるから」

「さすが！」

茂さんが拍手する。他のみんなも手を叩いた。

「お願いします」

「頑固なやつは面倒だな」

そう言って希一は結子を見た。結子は小さく首を振った。

それから数日地元に残り、望実は蔵や町のスケッチをした。帰りの新幹線ではアイデアが次々と湧いてきた。崩れた蔵のシルエット、その破片が少しずつ、地元伝統の織物の模様になり、その模様が合わさって「初風」の文字を描いていく。

今年だけの限定ラベルでいい。そう思った。また来年からは、これまでと同じラベルに戻そう、と。

しかし新しいラベルは人気を博すことになる。復興支援のお陰もあったが、壊れたものが形を変え、新しい伝統になっていくデザインは、たまたまその地を訪れ、その瓶を手にとった海外からの人々にも共感された。そしてネットで拡散された。

秋を待たずして、蔵のお酒は全てなくなった。もちろん、これまで取引のあった旅館や飲食店の分は確保して、だが。

「またラベル、お願いしてもいいか」

望実の隣に座り、一緒にスイカを食べながら希一は聞いた。

「いつもの印刷会社、やっぱりまだ難しいの？」

「来年は売上の一部を寄付しようと思ってる。新しいラベルなら、それくらいの売上は期待できるだろ」

「デザイン料、請求するよ」

望実が種を皿に落とす。もうひと口、かぶりついた。

「高いよ」

唇の端から果汁が滴る。

「こっちに戻ってこないか」

希一もかぶりつく。

蚊取り線香の煙が揺れている。風鈴がチリンチリンと鳴っている。